

ドイツ南部とウィーンの自然史博物館を訪ねて

おおしま みつはる
大島 光春(学芸員)

今年(2018年)1月に全国科学系博物館協議会が企画した海外視察研修に参加し、ドイツ南部とウィーンの博物館を訪れました。全部で11館1園を訪れましたが紙面の都合で、ドイツの2館とオーストリアの1館について報告します。



図1. ゼンケンベルク自然史博物館のファサード。写真より右は増改築の工事区域になるので、ディプロドクスが赤いヘルメットをかぶっている。

ゼンケンベルク研究所・自然史博物館
Senckenberg Forschungsinstitut und Naturmuseum (図1)

フランクフルト・アム・マイン (Frankfurt am Main マイン川沿いのフランクフルト。もう一つのFrankfurt an der Oderと区別される)にある世界的に有名な博物館です。私は学生のときに訪れて以来、約30年ぶりの訪問でした。見覚えのある展示もありますが、およそ2/3くらいが新しくなっていたという印象です。

1817年にゼンケンベルクと32人の市民によって設立されたゼンケンベルク自然研究協会 Senckenbergische Naturforschende Gesellschaft によって運営されています。2017年に創立200周年を迎えた同協会は、フランクフルトの博物館と研究所の他に2つの博物館(ドレスデンとゲルリッツ)と3つの研究所(海洋研究所、生物多様性および気象研究

所、昆虫研究所)からなり、収蔵標本は約4,000万点(当館の50~60倍!)とのことです。スタッフは約800人で、ボランティアは受け入れていないそうです。

こぢんまりした外観の博物館へ入り、エントランスホールを抜けると、恐竜ホールへと続きます。ホールにはイグアノドン、ディプロドクス、ティラノサウルスなどの恐竜とケツアルコアトルスがゆったりと配置されています(図2)。隣は海生爬虫類化石の展示室でホルツマーデン Holzmaden 産の魚竜やイギリス産の首長竜、アメリカ産モササウルスなどがあります。ドイツならではの展示として、1995年に UNESCO 世界自然遺産に登録されたグリュベ・メッセル Grube Messel 産の非常に保存の良い化石だけで構成された展示室があります(当館JB展示室にも少し標本があります)。また、企画展示室ヴォルフガング・シュトイビング・ホール Wolfgang-Steubing-Saal の生物多様性展示は、とても美しいだけでなく、タッチパネルや望遠鏡型の解説装置まであって、わかりやすくする工夫が凝らされた展示でした。他にもルーシーなど人類化石や植物化石、膨大な鳥類剥製の展示など、大変に充実しています。その上、さらなる



図3. 博物館最寄りのボッケンハイマー・ヴァーテル駅。電車が地下鉄になる(ウソ。入口です)。

充実を目指して、これまで研究所や収蔵庫として使ってきた建物を展示室にしたり、敷地内に直径25mのプラネタリウムを含む新しい建物を建設したりという、増改築工事が行われていました。直接関係ないのですが、最寄り駅の入口では、車両が地面にめり込んでいました(図3)。



図4. 中州に建つ長大なドイツ博物館。

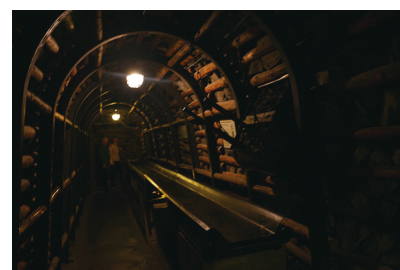


図5. 約400mの坑道展示。

ドイツ博物館
Deutsches Museum (図4)

ミュンヘンMünchen 旧市街の東を流れるイーザル川 Isar の中州に建っています。湿気や洪水を心配してたずねたら、浸水したこともあったそうです。浸水対策も含めて2008年から建物の改修および展示更新工事が始まり、100周年を迎える2025年に完成予定だそうです。改修が終わると、閉鎖中の25,000m²の展示室が加わり、51,500m²(当館の10倍以上!)になるのだとか。

同館はオスカー・フォン・ミラー博士 Oskar von Miller が1903年に設立した財団からはじまり、今の場所に1925年に移転しました。先進的な展示を行い、1928年に開館したシカゴ科学・産業博物館の手本にもされたとのこと。その後、第二次世界大戦により大きな被害を受けましたが再建し、航空博物館、交通博物館などの分館を持つに至りました。2020年には新しい分館がニュルンベルクに開館予定だそうです。研究部門は自然科学、人類と環境、交通、材料とエネルギー、コミュニ



図2. 恐竜ホール。手前からイグアノドン、ディプロドクス(全身と頭骨)、ティラノサウルス(見えにくい)、トリケラトプス(頭骨2個と下半身が見える)、上空にケツアルコアトルス、左手前の物部はステゴサウルス。中央の大きな本(↑)は200周年記念誌。

ケーションと情報の6分野からなり、展示は50項目あって広い分野をカバーしています（工事中は36項目）。

入館するには（中州なので）橋を渡って、渡り廊下をくぐり中庭に出ます。右手に博物館の入口があり、左手に大きな附属図書館 Bibliothek des Deutschen Museums があります。その図書館（蔵書が100万冊！）の会議室でレクチャーを受けてから、中庭を抜けて博物館に入館しました。

海王星を発見した望遠鏡、核分裂を発見した実験装置、レントゲン博士のレントゲン装置、ライト兄弟の飛行機などたくさんの実物（！）が展示されており、他にもUボートの輪切り、飛行機、帆船、製鋼の機械、エンジンの鋳型などがあります。それらの中で、特にすばらしいと感じたのは鉱業の展示です。館内に暗い坑道があり、その中を上ったり下ったり曲がったりして巡りながら探検気分で見学します（図5）。16世紀から現代までの石炭や岩塩などさまざまな採鉱の様子を再現したジオラマや模型、実物の機械などが展示されていました。狭くて暗くて曲がっていて、階段や坂もあるので、長さがわからなかったのですが約400mだそうです。バリアフリー化は困難でしょうが、とても良くできた体験型展示だと思います。



図6. 宮殿のようなウィーン自然史博物館。

ウィーン自然史博物館

Naturhistorisches Museum Wien（図6）

恥ずかしながらウィーンに行くことになるまで、まったく知らなかった博物館ですが、近づくとその宮殿のような建物に圧倒されました。広さはともかく、立派さではルーブルに勝るとも劣らないと思ったくらいです。とにかく立派！

フィレンツェに行くところでもメディチ家が登場するように、ウィーンではハプスブルク家のマリア・テレジア、その夫のフランツ I 世 Franz I.、フランツ・ヨーゼフ I 世 Franz Joseph I. がやたらと登場するのです

が、同館はそのフランツ・ヨーゼフ I 世がつくった博物館です。ウェブサイト <http://www.nhm-wien.ac.at/en> によれば同館のコレクションはフランツ I 世が1750年にフィレンツェの科学者バイユウ Jean de Baillou から当時世界で最も有名だったバイユウ・コレクション（30,000点に及ぶ化石や貝類、サンゴ類、岩石、鉱物等からなる）を購入したことに始まります。そして、約140年後フランツ・ヨーゼフ I 世によって美術史博物館と向かい合うこの建物が建設され、1889年に公開されました。

現在は約60人の研究者がおり、大学以外では国内最大の自然史研究センターでもあるそうです。オーストリアの人口（約875万人 2016年）は神奈川県より少ないのですが、自然史博物館の充実度は当館とは比較になりません。

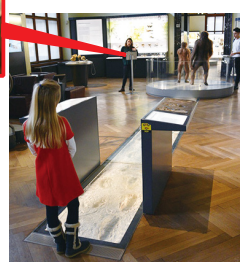
展示室はやはり宮殿のようで、一つひとつが広く、天井は非常に高く、壁の上部や一部の天井には展示テーマに関連した壁画・天井画が描かれています（図7）。39もの常設展示室があり、1階は岩石・鉱物、隕石、化石、恐竜、人類ほか、2階が微生物、軟体動物、甲殻類、昆虫、魚類、両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類となっていました。展示室によっては展示ケースの上にたくさんの剥製や模型が展示され、天井が高いことを利用して立体的な展示がデザインされています。歴史を感じさせる古いタイプの展示（その中には単に昔のままのものと、最近つくられたものがある）と、タッチパネルやVRを利用した新しいタイプの展示が混在しています。どちらもそれぞれに魅力的な展示



図7. 古生物の展示室。古いタイプの展示。



図8. ラエトリの足跡とアウストラロピテクス・アファレンシスの模型とVRを組み合わせた展示。



ですが、古いタイプの展示にはたくさんの標本が並べられ、1日で全部を見るのはかなり大変です。そのことは博物館側も理解しているようで、「NHM TOP 100」（自然史博物館100選）という表示があり、時間がない見学者の役に立っています。ただし、その資料がなぜTOP100に選ばれているのかに関する説明やコメントは（たぶん）ありませんでした。

人類学展示室では、1978年に発見されたラエトリの足跡化石レプリカの先に、アウストラロピテクス・アファレンシスの復元模型が置かれています。その足跡の上を歩いて行くと、小さなモニターにはアウストラロピテクス・アファレンシスが歩いてくる様子が映し出されます。1人では体験できないのが残念ですが、足跡化石の意味、古人類の復元、その動きと見学者の重ね合わせが、とても良いインプット展示を作り上げていると思いました（図8）。

同館の中央にそびえるドームの下は、たぶん世界一豪華な内装のミュージアム・カフェになっています（図9）。本場のウィнна・コーヒーを楽しむ時間がなかったのが心残りです。

「百聞は一見にしかず」と申します。海外の空気に触れ、さまざまな博物館・美術館・動物園などを見て歩き、調べて比較する機会を得ることは、当館や日本の博物館を考える良い機会となり、他に替え難い体験だと感じています。

最後に海外視察研修を主催した全国科学系博物館協議会、旅費の補助をいただいた全国科学博物館振興財団、カメイ社会教育振興財団に御礼申し上げます。

JSPS 科研費課題番号20605018「博物館体験の向上をめざす展示解説手法の研究」（研究代表者 大島



図9. ドームの下に豪華なミュージアム・カフェ。

光春）を使用しました。本記事中の日本語の館名称・団体名などは、著者による和訳です。